〔作品紹介〕

ヨナスは目を覚ます。いつもと同じ朝だ。朝食にコーヒー。新聞は、先月にも一度あったように、家のドアの前にない。ラジオ、テレビ、そしてインターネットにただ雑音ばかりが受信されたとき、最初の苛立ちが始まる。彼女にかけた電話には誰も出ることなく、ただ鳴るだけだ。ヨナスは通りに出る。いまやなんの錯覚でもない。彼はひとりだ。

他者が消えてしまったとき、人間は一人で生きられるのか。周りの世界とその事物は残っていても。つまり、通りやスーパーマーケット、駅、すべてががらんとしているのだ。ヨナスは、ウィーンを、よく知った道を、馴染みの家並みをさまよい歩くが、彼に返事をする者はいない。彼は破局の最後の生き残りなのか。住民は町を去り、どこか別の場所にいるのか。他者がいる兆しはあるのか、あるいはただの彼の妄想なのか。

たえざる緊張感を保ちつつ、トーマス・グラヴィニッチは、ある一人の人間を物語っている。その語られた人間は、もはや誰も存在せず、自分の過去への回想が、すべてのものが死んだ世界で唯一の生きたものとなるように見えるとき、人間そのものとは何かを知るのである。

夜仕事

トーマス・グラヴィニッチ

（7～11頁）

「おはよう！」と彼はキッチンに向かって叫んだ。

彼はテーブルに朝食用の食器を運び、ついでにテレビのスイッチを入れた。マリーにショートメールを送った。「よく眠った？君の夢を見たよ。それから自分が目覚めていることに気づいたんだ。愛してる。」

テレビ画面がちらついていた。彼はORFからARDにチャンネルを変えた。画面には何も映らなかった。彼はZDF、RTL、3sat、RAIと次々にチャンネルを変えた。砂嵐。ウィーンローカル放送。砂嵐。CNN。砂嵐。フランス放送、トルコ放送。受信画像なし。

ドアの前には、マットの上に雑誌『クリエール』がある代わりに、彼が面倒くさがって片付けなかった、古びた広告のビラがあるだけだった。頭を振りながら、彼は廊下にできた紙の山から先週の新聞を取り、コーヒーのところに戻っていった。購読解除、と彼は頭のなかにメモをした。もう先月から彼は一度も新聞を受け取っていなかった。

部屋のなかを見回した。床にはシャツ、ズボン、靴下が散らばっている。キッチンワゴンには昨日の夕食の食器が乗っている。ごみが臭った。ヨナスは顔をしかめた。彼は海辺で二、三日過ごしたいと思っていた。マリーに付いて行くべきだったのかもしれない。親戚を訪ねるのは嫌なことではあったけれど。

彼がパンをもう一枚切ろうとすると、包丁が滑って指に深く刺さった。

「ああ、クソ！これじゃどうしようもない…」

歯を噛みしめながら、彼は血が止まるまで手を冷たい水につけていた。傷をよく見てみた。切り傷は骨まで達しているが、腱には傷はないようだ。痛みもヨナスは感じなかった。彼の指には清潔な穴がぱっくりと口を開けていて、骨が見えた。

ふらふらした。深く呼吸をした。

彼が見たものは、誰も見たことのないものだった。彼自身も今までなかった。この指で三十五年来生きてきたが、内部がどうなっているのか、彼は知らなかった。自分の心臓や脾臓がどのように見えるのか、知らなかった。とりわけ彼がそれに関心を持っているということではない、むしろ正反対だ。けれど、このむき出しの骨は疑いもなく彼の一部なのだ。今日初めて彼はそれを見たのだった。

指に包帯をしてテーブルを拭いてしまうと、食欲が失せていた。メールと、ワールドニュースに目を通そうと、彼はパソコンに向かった。ブラウザのスタートページは、ヤフーのホームページだ。ヤフーページの代わりに、サーバーのエラーメッセージが現れた。

「ああ、もう！」

まだ時間があったので、彼はテレカーベル社に電話をかけた。音声案内のガイダンスが聞こえない。彼は呼び出し音をずっと鳴らしていた。

バス停で、彼は書類ケースから新聞の週末付録を取り出した。それを読む時間がこのところ彼には無かったのだ。朝日に目が眩んだ。ジャケットのポケットのなかを手探りしてから、サングラスはコート掛けの引き出しのなかだったことを思い出した。マリーがもう返信したかどうかを確かめた。彼はまた新聞を広げ、「素敵に住む」のページをぱらぱらとめくった。

紙面にうまく集中できなかった。何かが彼をいらいらさせた。

しばらくして、彼は内容を理解することなく、何度も同じ文を読んでいたことに気づいた。新聞を小わきに挟み、数歩進んだ。頭をあげたとき、自分のほかには誰も姿が見えないことに気づいた。人影もなく、車も見当たらない。

ジョークだ、と思った。それから、祝日に違いない、と思った。

そうなんだ、だとすれば、いくつか説明がつく。祝日なのだ。祝日には、テレカーベル社の技術者が故障した配線を修理するのに時間がかかる。バスも運行の間隔があく。そして通りに人も少ない。

ただし7月4日は祝日などではない。いずれにせよ、オーストリアではちがう。

彼は角のスーパーマーケットに行った。閉まっていた。彼はガラスに額をつけて手をかざした。誰も見当たらない。やはり祝日なのだ。あるいは、ストライキだ。その知らせを彼は聞き逃していたのだ。

バス停に向かう間にまた、バス39Aが角を曲がってきやしないか、と彼は辺りを見回した。

彼はマリーの携帯に電話をかけた。出なかった。留守番電話の音声さえ流れない。

彼は自分の父親の番号にかけた。またもや出ない。

試しに仕事場にかけてみた。誰も電話を取らない。

ヴェルナーもアンネもつかまらない。

困惑しながら彼は携帯電話を上着のポケットにつっこんだ。その瞬間、彼は辺りがまったく静寂なことに気づいた。

家に帰った。テレビをつけた。砂嵐。パソコンをつけた。サーバーエラー。ラジオをつけた。雑音だけ。

ソファーに座った。考えをまとめることができなかった。手は汗で湿っていた。

コルクボードのしみだらけのメモから、マリーがもう何年も前に彼にと書いた番号を読み取った。彼女がイギリスに会いに行った姉の電話番号だった。電話をかけた。オース

トリアの呼び出し音とは異なる音が鳴った。より低く、それぞれの音は二つの短いトーンから成っていた。十回コールを聞いてから、受話器を置いた。

また彼は家から出て、左右の様子をうかがった。足を止めることなく車に向かった。何回か、肩越しに振り返った。立ち止まり、耳をすました。

何も聞こえなかった。走り去る足音も、咳払いも息遣いも聞こえない。何もなかった。

トヨタの車内はむっとしていた。ハンドルは熱く、包帯を巻いた人差し指と親指のつけ根とでようやく触ることができるほどだった。ドアハンドルを回して窓を開けた。

外からは何も聞こえなかった。

ラジオのスイッチを入れた。雑音。全てのチャンネルでそうだ。

いつもならびっしりと並ぶ車で渋滞する、がらんとしたハイリゲンシュテット橋を越えて、船着場を市内方面へ入った。誰かいないかと目を見張った。あるいは少なくとも、ここで何が起こったのかを彼に明かすなんらかのしるしを。しかし目にするものは、止まっている車ばかりだった。まるで車の持ち主がほんの少しの間だけ玄関に入っていったかのように、交通規則どおりに駐車されていた。

彼は自分をつねってみた。頬を引っかいた。

「おおい！ねえ！」

フランツ・ヨーゼフ・カイで自動速度取り締まり機に彼は写真を撮られた。上げた速度で安全感覚を失っていたので、彼は70キロ以上で走っていたのだ。ウィーンの中心街とそのほかの地区との境界を作るリングシュトラーセに入り、さらにスピードを上げた。シュヴァルツェンベルク広場で、停車して仕事場に行こうかと考えた。90キロのスピードで、オペラ座、ブルク庭園、ホーフブルク宮殿を過ぎた。最後の瞬間にスピードをゆるめて、ヘルデン広場の門を通り抜けた。

見渡す限り誰もいない。

赤信号に、タイヤの音を立てて停止した。ライターをしまった。ボンネットの下のエンジン音のほかには何も聞こえなかった。髪をなでた。額の汗を拭いた。手を組み合わせて、指の骨を鳴らした。

鳥も一度も見えなかったことが、不意に奇妙に思えた。

〔…〕

（148～150頁）

アター湖畔の町で小さなテントとマットをくすねてから、彼はモント湖に着いた。二回ほど道を間違えて農道を走ったが、それから、昔キャンプした場所を見つけた。モント湖の岸から三十メートル離れたところに彼は横たわった。以前はやぶだったが、今は芝生で、公共水浴場の一つになっている。ヨナスは荷物を投げ下ろし、モペットにのって近くを探索した。

とっくに近代という時代が入り込んでいた。木々に囲まれたサッカー場ほども広い草原から水浴場はなっていた。着替え場とトイレの隣には、無料のシャワー場があり、子供の遊び場、貸しボートに売店があった。駐車場の向こうには、レストランのバルコニーが人を誘うかのように見えていた。

彼はテントを組み立てた。取扱説明書はわかりにくかった。草むらの上に広げた完成図とポールを相手に、彼は疲れて、ふらふらだった。それでも何とか組み立てると、テントのなかにマットを投げた。残りの荷物は入り口の脇に立てかけた。彼は草の上に寝転んだ。

時計を持ってきていなかった。太陽が高く昇っているから、正午をすぎた頃にちがいない。Ｔシャツを頭から脱いだ。靴と靴下を脱ぎ捨てた。湖を見やった。

ここは美しかった。木々は葉を風に柔らかくそよがせていた。濃い緑の草原。湖畔の茂み。水面を陽光に輝かせる湖。深い青空にそびえる遠方の山。それにもかかわらず、魅力的な光景を味わっていることを彼は自分に意識させなければならなかった。どうやら睡眠不足であったらしい。

以前はある考えにふけり、戯れ、さまざまな形に練り上げることに没頭していた。その考え、とりわけ、この目の前に広がるような牧歌的な場所を思い出した。歴史上の任意の人物、たとえばゲーテは、ヨナスがまさに体験した日の証人にはならない、と思った。なぜなら、ゲーテはもはや去ってしまったのだから。

こんな日々は前にもあった。ゲーテは草原を越えて歩き、太陽を見て、山を観察し湖で泳いだが、ヨナスには何もない、一方で、ゲーテには全てが目の前にあった。おそらくゲーテは、自分の後に来る者たちのことを考えていたのだ。もしかすると、変わるかもしれないことを想像していたのかもしれない。ゲーテはこのような日を体験したが、ヨナスにはなかった。ヨナスがいようがいまいが、しかしながらその日はあったのだ。そして今、

ヨナスがいる一日はあるが、ゲーテはいない。ゲーテは去ってしまった。つまり、彼はそこにいなかった。ゲーテがいた日にヨナスはそこにはいなかったように。今、ゲーテが体験したことをヨナスは体験し、風景と太陽を見た。湖や風には、そこにゲーテがいようがいまいが問題ではない。風景は同じだ。一日は同じだ。そして、今後百年間おなじだろう。しかしそのときにはヨナスはいない。

このことが彼の関心事だった。彼なしの一日があるかもしれないということが、彼がいなくとも認められる一日があるかもしれないということが。風景と太陽と湖の波、彼はいない。誰かほかの人が目にするかもしれないし、以前に先人がここに立ったことを思い出すかもしれない。この誰かは、ひょっとするとヨナスのことさえ思い出すかもしれない。ヨナスがゲーテのことを思い出したように、彼が感じて体験したことを思い出すかもしれない。そしてヨナスは、彼が感じることなく過ぎ去る百年のうちの一日を思い描いた。

しかしどうなのだろう。

百年のうちに誰かがその日を感じるだろうか。一帯を散歩してゲーテとヨナスのことを考える人はいただろうか。あるいはその日は、観察者もなく、一日が存在するということに委ねられた日というものなのだろうか。それで、――ある日とはいったいなんだったのだろう。そんなある日というものよりも意味のないものはあるのだろうか。モナ・リザはそのようなある日にはいたのだろうか。

百万年前からこれはここに存在していた。違って見えていたかもしれない。山は丘か、それどころか穴だったかもしれないし、湖は山の頂上だったかもしれない。どうでもいい。そのようにあったのだ。そして誰もそれを見てはいなかった。

（加藤由美子〔上智大学非常勤講師〕訳）